

二〇二六年度

群馬県立女子大学 文学部 美学美術史学科

前期入試問題 総合問題

試験時間は、十三時～十四時四〇分までの一〇〇分です。中途退室は認めません。途中で気分の悪くなった場合は、黙って手を挙げて下さい。

問題用紙はこの表紙を含めて十二ページ（最後の白紙部分は下書き用）、解答用紙は三枚です。それぞれが配られたら、指示に従って、解答用紙の所定の欄に受験番号と氏名を記入して下さい。試験開始の合図があるまで問題用紙の表紙をめくって問題を見てはいけません。

受験番号と氏名を記入し終えたら、静かに試験の開始を待って下さい。

問 題

以下の文を読んで、設問に答えなさい。なお、問題文の直前の箇所では、著者は、十五、十八世紀、西ヨーロッパの王や貴族などの蒐集文化活動について言及し、彼らの好奇心のままに集められ、プライベートな部屋やキャビネットにあふれかえるように収められたコレクションと、伝承めいた知識や蒐集品に対する情熱を所有者が客に語るコミュニケーションが「科学」化していく過程に、新しいまなざしが誕生したことを述べています。

キャビネットにみられた視覚は、のちに「パノラマ的視覚」として近代型ミュージアムに引き継がれていく視覚の原型であった。それはモノを物理的である以前に視覚的に集合させることによってひとつの世界観（＝小宇宙）を完成させようとする表象文化である。

しかし一方で、パノラマ的視覚は、明確に帝国主義的な思想をもって地球上を俯瞰するという点において、それまでの視覚とは決定的に異なる特質も持っている。鉄道旅行、観光、博覧会——帝国主義と分かちがたく結びついたこれらの習慣や装置が誕生し、大衆に新しい視覚と認識を浸透させていった。そして、ミュージアムという空間も、その延長線上に完成していくのである。

鉄道旅行の風景

ヴォルフガング・シヴェルブシュの『鉄道旅行の歴史——一九世紀における空間と時間の工業化』は、鉄道の歴史を起点に

近代という時代がいかに立ち上がっていくかを論じたものである。シヴェルブシュは、蒸気機関が可能にした鉄道の登場が、当時の人々の時間と空間への認識にどれだけ決定的な変化をもたらしたかをつまびらかにしていく。鉄道は、まずスピードの速さにおいて、次に風景を変えたという点において、そして何よりも、ひとつの空間に「実体なき境目」——同じ空間にないがら起きる内側と外側という空間分離の現象——をつくったという点においてそれ以前とはまったく異なる感覚や認識をつくりあげていった。そして、この三つ目の変化こそが、西洋近代に生まれた視覚であった。

少し長いが、そのまま引用しよう。

「ヨーロッパの窓からの眺めは、奥行きを失った、というシュテルンベルガーの観察は、その現象がまず鉄道の車室の窓からの眺めで起きたということで、実証されている。産業革命前の時代の知覚にあった奥行きは、速度によって近くにある対象が飛び去ってしまうことで、鉄道では全く文字通り失われる。これは、産業革命前の旅の本質的な体験を構成していたあの前景の終焉^{しゅうえん}を意味する。この前景越しに、昔の旅人は通り過ぎてゆく風景と関係を保っていた。彼らは自分がこの前景の一部であることを自覚していたし、この意識が彼らを風景と結び付けていたし、その風景が遥^{はる}か彼方まで広がっていようと、彼らの意識は風景の中に彼らを編み込んでいたのである。速度のために前景が解消すると、この立体感覚も旅行者から喪失する。旅行者は、遠いものも近いものも包含している「全体空間」から、抜ける。旅行者のいる位置と、彼が知覚している風景との間に、リヒャルト・ルーケがガラス建築で「ほとんど実体なき境目」と名づけたものが入り込む。大気の質を明らかに変えることなく、ガラスが水晶宮（注1）の内部空間を、自然の外部空間と分離するように、鉄道の速度は、以前は旅人がその一部であった空間から、旅人を分かつのである。旅人が抜けてしまった空間は、旅人の目にはタブロー（注2）

になる（中略）。ラスキン流の伝統的な目とは異なり、パノラマ的のものを見る目は、知覚される対象ともはや同一空間に属していない。」（傍点は原著者）

地理的な^①起伏とは無関係に直進する列車のスピードとガラス窓という技術が可能にしたのは、眺めている空間——「知覚される対象」——と、自分が属している空間との認識論的な分離である。旅人は、そこにいながらにして、認識論的にはその外部にいたのである。シュテルンベルガーが「至るところ絵画的平面ばかりの、全く同じパノラマ世界」と呼んだこの車窓の風景をまなざす視覚は、ひとつのフレーム内に収めて平面的にまなざすキャビネットの視覚の延長線上に出現した。

シヴェルブシュは、この現象が当時鉄道以外の場でも起きていたことを、ロンドンの万国博覧会の水晶宮の空間を例に出して説明する。鉄道とガラス建築は共に「産業革命により増大した生産力そのものの表現」（傍点は引用者）であり、とりわけガラス建築は鉄道の駅やパッサージュ（注3）や博覧会会場などに使用されることで完全に空間を変えてしまった。厚みのあった壁は消えて、代わりにガラスの膜が区間を隔て、内部と外部の境界線があいまいな空間を出現させた。また、壁のある建物に特徴的だった光と影の^②コントラストが解消され、陰影のない明るい内部空間が誕生した。それはまさに近代の象徴である鉄とガラスが可能にした空間認識であり、視覚であった。

博覧会と「観光のまなざし」

この新しい視覚は、やがて帝国主義と博物学という、互いに密接な関わりをもつ二つのパラダイムと結びついていく。そして、この視覚が、当時出現する様々な文化装置に埋め込まれていくことで、近代特有の視覚と認識を編み上げていくのである。

（以降本章では、シヴェルブシュの言及する視覚がこの二つのパラダイムと結びついていくプロセスも含めて「パノラマ的視覚」と呼ぶ。）

吉見俊哉^{しゅんや}は、博物学的まなざしが帝国主義的なまなざしと分かちがたく結びつく場として、またそれがスペクタクルとして「展示」されるにいたる場として、博覧会が果たした役割に着目した。万国博覧会の時代と言われる一九世紀後半は、一八五一年のロンドン万博を皮切りに、次々と帝王主義の祭典が催された時代である。大航海時代以降、世界各国に遠征したヨーロッパは広大な植民地を手に入れ、資源や労働力を意のままに移動させることで「近代世界システム」を完成させていったが、博覧会こそは、そうした西洋近代の富と権力を蒐集し、展示し、強化していく巨大な表象装置として機能した。

「……地球規模で増殖し続けたこの資本主義のスペクタクルは、何よりも帝王主義の巨大なディスプレイ装置であった。博覧会は、テクノロジーの発展を国家の発展、つまりは帝国の拡張に一体化させ、そのなかに大衆の欲望を包み込んでいった。」（吉見俊哉『博覧会の政治学——まなざしの近代』中央公論社、一九九二年、一八〇ページ）

ここでは、産業技術を駆使した大砲やエレベーターやイルミネーションのショーも、徐々に増えていく植民地の珍しい文化（衣装、工芸品、武器、舞踊等）を紹介する見世物も、すべて帝国の偉大さを誇示するディスプレイであり、鉄とガラスで出来た巨大な展示空間は、それらを均質な光の中で一望できる、刺激的な展示空間を提供したのである。

そうしたなかで、進んだ機械文明をもつ西洋に「発見」され、所有されてゆく植民地が、西洋にとって最も好奇心に満ちた存在であったことは想像に難くない。一八八九年のパリ万博における植民地集落と原住民の展示は、こうした「帝国主義のディ

スプレイ装置」の究極形だった。それはまなざす好奇の対象、目の快楽であると同時に、認識の上では全く得体の知れない「他者」であった。すなわち「野蛮人」の展示は、いわば車窓の眺めであり、それは自分たちとは対置され、線引きされる対象であった。

このように、鉄とガラス、そしてそこに展示されたディスプレイが人々の自己認識や空間感覚をドラスティックに変えていく中で、まなざすことへの欲望は、大衆の間にいつそう③喚起されていった。ガラス張りの明るい博覧会会場の中、見知らぬ大勢の他人と共に格子状に並べられたモノを眺めながら回遊する身体と、誰かが蒐集した珍しいモノや、国力を示す象徴的なモノを眺めることを欲するまなざしが、大衆レベルで形成されてゆくのである。

この時期に大衆化した旅行や観光の習慣もまた、こうした視覚の形成の④一翼を担っていた。かつて上流階級に限られていた旅行は、鉄道の開通とともに中産階級や労働者階級にも裾野を広げ、大衆が「魅惑のオリエント」をまなざすことも可能になった。一八六九年にスエズ運河が開通すると、ドイツのシュタングェンが早速エジプト旅行を企画し、翌年、イギリスのトーマス・クックがそれに続いた。一八七八年には、シュタングェンは第一回世界旅行を企画している。こうして、まなざしを向けるべき対象やその向け方が提案され、「観光のまなざし」なるものが確立されていく。それは「日常から離れた異なる景色、風景、町並みなどに対してまなざしもしくは視線を投げかける」行為であった。西洋人はオリエントに出かけていき、「未開」の人々を眺め、そしてその正反対の像として自分たちの「文明」を意識化させていった。

こうしてシヴェルプシュが生産力の表現形式と呼んだ鉄道とガラス建築が、ヨーロッパにおけるパノラマ的視覚を浸透させていくのであるが、それは純粹に生理学的な視覚では当然ありえない。そこには「非ヨーロッパのあらゆる民族・文化を凌駕するものとしてみずからを認識するヨーロッパのヨーロッパ観」というイデオロギーが深く刻まれていった。そしてヨーロッパ

パ人の「心象地理」であるオリエントを作り出した「実践」として、博覧会も鉄道旅行も観光も、帝国の重要な役割を担ったのである。このようにみえてくると、パノラマ的視覚こそが、オリエンタリズムや、その一形態であるプリミティヴィズムという思考様式を支えている視覚特性であるといえる。オリエンタリズム的なまなざしは、パノラマ的視覚というメカニズムによって生じている、と言い換えてもよい。

ところで、この帝国の「展示」に^⑤通底しているのは、一七世紀以降出現した博物学的な分類体系である。フーコーがつまびらかにしたように、博物学は、それまでの視覚以外の嗅覚や伝聞や神秘を一切排し、視覚と言語が一对一で対応する、圧倒的な視覚優位のパラダイムをつくりあげていった。そして、博物学者が動植物を細かく視覚によって分類し、体系化していったのと同様に、博覧会では、国ごと・地域ごとに品物が分類され、整然と明るく陰影のない空間に格子状に並べられていった。

とりわけ一八六七年のパリ万博がこうした思考様式を可視化した展示空間となっていたことは、よく知られている。当時の組織委員会の報告書には、この万国博覧会の方法論的認識が明確に記されている。すなわち、フランスとその植民地及び他の帝国との関係が可視化される放射線と、芸術、リベラルアーツ、家具調度などといった展示品の内容で分類された同心円という「二つの分類システムをもった円形の配置法」によって、万国博覧会の構造は視覚化されていたのである。

こうしてタブロー化された大量のモノの展示は、対象に対する奥行きを全く持たない平面的なまなざしを形成していった。ここでは、様々な国の文化は陰影のない空間に様に展示される品々によって表象されている。先にみたように、キャビネットにも既に代替による表象という文化があり、このような絵画的で立体感覚のない他者へのまなざしを既に用意していた。しかし、地球上に分類の網を（優劣をつけながら）はりめぐらせて、世界を俯瞰するような帝国主義的なまなざし、すなわち「帝国のスペクタクル」を欲望するような視線は、ここにきて、確固たるものになっていったのである。この視覚によって、世界

を俯瞰し、蒐集し、分類し、そのなかで、他者を自分より劣性の存在として位置づけ、それを科学的に正当化していくことで西洋近代の知が確立されていくのである。そして、こうした視覚性と思考様式が、ミュージアムという装置にもしっかりと埋め込まれていく。

出典…村田麻里子『思想としてのミュージアム——ものと空間のメディア論』（人文書院、二〇一四年）

※なお一部改めたところがある。

（注1）水晶宮…一八五一年、ロンドンでの第一回万国博覧会で建設された鉄とガラスによる展示館。近代建築の先駆例。

（注2）タブロー…絵画のこと。

（注3）パッサージュ…十九世紀のパリに始まった、高級店などが通路をはさんで軒を連ねる形式の商業空間。アーケード。

【設問】

問(1) 傍線部①～⑤の言葉の意味を本文の内容に即して説明しなさい。(各3点)

- ①起伏
- ②コントラスト
- ③喚起
- ④一翼
- ⑤通底

問(2) 波線部「実体なき境目」(5ページ)とはどういうことか、一五〇字以内で説明しなさい。(20点)

問(3) 破線部「帝国主義的なまなざし」(7ページ)とはどういうことか、一五〇字以内で説明しなさい。(25点)

問(4) 本文を要約したうえで、現代社会における「見る」と「見られる」の関係について、あなたの考えを八〇

〇字以内で述べなさい。(40点)

下書き用紙

